

自由討論

●—司会 第1セッション、第2セッションともに、非常に立ち止まって考えさせられる深い内容だったと思います。第1セッション、第2セッションを通して、どのように思われるかということもあります。ただ、第1セッションの自由討論の際に、まだお出でになっておられなかった松本健一さんに、まず最初にコメントをいただこうかと思えます。どうぞ、松本さん。

●—松本 第1セッションに間に合わなかったので、そこを踏まえてコメントをすることができませんが。

私の竹内好とのかかわりは、大学1年のときからです。ちょうどそのときに、中国が核実験、原爆の実験をしました。そのときに中国の核実験はきれいな原爆で、アメリカの原爆は汚いというような言説がありました。竹内さんのものはそれとは一脈違ってまして、どのようなことを言ったかという、「よくぞ西洋の鼻を明かしてくれた。中国が原爆実験をしたことによって、アジアにその力があるのだということを見せてくれたのだ」と。「よくぞ西洋の鼻を明かしてくれた」という言説が、竹内さんによってなされました。

そのときに私は、岩波書店の月刊誌『世界』を読んでいました。「竹内好よ、お前もか」というのが私の18歳の経験でした。

60年安保のころは、私たちはまだ中学生でしたが、「岸を倒せ」という中央の思想とはまったく違っていました。私が育ったところは、昔の中島飛行機の基地があったところで、戦後、最初は占領軍基地、次は進駐軍基地、そしてまたそのあとは米軍基地となり、1964年まで米軍の基地が置かれていました。ベトナム戦争が始まったあと、

日本に対して接収解除をして、そしてそこから米軍は全部出て行ったということになります。

ですから、60年安保のときに私は中学生でしたが、米軍基地に押しかける一員となっていて、そのときの私たちの町のスローガンというのは、「岸を倒せ」でもなく、もちろん「社会主義革命」でもなく、何と言ったかという「Yankee go home」でした。ですから、中学生としても非常にわかりやすかったです。

アメリカがそんなにひどいことをしたのかというと、私が英語を勉強したのもアメリカ兵によって教えられましたし、最初にソフトクリームを食べたのも、アメリカ人のソルジャーによって与えられました。それからコカ・コーラを飲ませてもらったのも米軍基地のなかです。初めて「なんだ、アメリカ人というのは、こういう薬臭いものを飲んでいるのか」と思ったのが、私の経験です。

そのときには、アメリカと中国の両方を見るとするのは、私たち占領期の少年の感覚でした。そういう感覚があったので、竹内さんが、中国の核実験に際して、「よくぞアメリカ、西洋の鼻を明かしてくれた」と言ったのは、非常によくわかるわけです。しかしそのことによって、中国もまたアメリカと同じ立場に立っているのではないかというのが、18歳の青年の素朴な感想でした。

そのあと、私は竹内さんの作品をずいぶん読むようになりました。竹内さんが啓蒙者だというのが、先ほど菅孝行さんのレポートのなかにもありました。私と菅さんはもう30年ぐらいの論争相手です。ここ10年ぐらいはしていませんが、若いときには論争相手でした。そのときに抱いた「竹内好観」は、啓蒙者として現れてくる竹内さんは、

非常に啓蒙であるから、その次の瞬間には古びてしまう言説を言うようになっていくな、という感想を抱いていました。

ですから、例えば私が1975年の『竹内好論』のなかに例として挙げたのは、竹内好さんの言説のなかで、一番古びる可能性があるのは、「現代中国論」であるとした覚えがあります。つまり、中国はどんどん変わっていくわけです。そうすると、それに対して、中国はこうなっているということを追いつけるような言説は、昨日の論文がもう次の日には役に立たなくなってくるという側面が出てきているという気持ちが常にありました。

ただ、私は20代のころ、竹内さんのところによく出入りしていました。啓蒙者として振舞っている竹内さんの底には、絶対に変わらないというようなものがあるとも感じました。

それは、竹内さんの「ナショナリズム」と言っているのか。竹内さんは、「ナショナルな思想というふうには私は言いたい」と言っておられました。「ナショナリズム」とは少し違うと。しかし、そこで菅さんのように、「エスニシティー」という言葉を使ったらいいのかというと、竹内さんのなかには、「エスニシティー」という感覚は、あまりないのではないかと思います。

竹内さんは戦争中から回教圏研究所に入って、イスラム関係の論文も書いています。ただ、そういう「エスニシティー」に対する関心は非常に希薄ではないかと思います。まさにナショナルな思想で、民族が生きている生き方というのは、あまり変わりはない、と考えたのではないのでしょうか。

それが国家という形態をとる場合もあるけれども、しかしその国家というものを超えて、民族精神、エトスというものがあるのではないかと。これは、国家主義とは少し違います。「ナショナリズム」と言っても、日本語では「国家主義」と訳すこともできるし、「民族主義」と訳すことも、「国民主義」と訳すこともできます。

場合によっては「国粋主義」と訳すこともでき

ると思いますが、そのように考えると、竹内さんの思想は、国家主義に収斂しないような、民族主義に近いものが、彼のナショナルな思想ではないかなと考えています。

それが菅さんの報告を聴きながら、私が思い浮かべていたことです。その啓蒙者としての竹内好像というものを、どのように評価するのかというと、やはり非常に大きな問題が出てきます。例えば、竹内さんは、文化大革命が批判をされたあとも、実は文化大革命に対するある思い入れ、夢みみたいなものを託していたところがあります。しかし、そんなことを言ったら、これはむしろ非常に政治的な意見になってしまうので、そのときには沈黙をしています。「沈黙は批判の言葉である」というのが竹内さんの言葉のなかにありますが、文化大革命については、沈黙しながら直接批判をしないというかたちで、ある種の思いの丈を表していたのではないかと思います。

そう考えると、竹内さんのその本質は、言ってみれば、やはりロマン主義だと思います。竹内好の中国像は、ある幻想に近くなっているような側面があると思います。

ロマン主義というのは、美しいものを見ようと思ったら目を閉じる、という精神の傾きですから、中国の美しい、中国民族の美しい流れを見るためには、現実の中国は見ないほうがいい、あるいはそれは無視しても構わないのだというところがあったと思います。

それが現実の中国に沿おうとすると、啓蒙者の像として竹内さんが表面に現れてくるわけですが、それは現実によって、常に裏切られていくようなところがあったと思っています。

先ほどの鶴見さんの話でもありましたが、鶴見さんは私たちの先輩ですが、埴谷雄高さんとか、竹内さんとか、吉本隆明さんと一緒に話していると、タイプとすると、竹内さんは、吉本さんにちょっと似ています。1時間のうちに59分話しているのが埴谷さんです。最後の1分、要するに、

ほとんどポツリというかたちで、竹内さんはそれまでの言説を全部引っくり返してしまうところがあります。吉本さんの世代に置き換えると、59分話しているのが谷川雁で、吉本さんがそれに対して一言を言います。

例えば「俺はいかに女性にもてたか」という話を、あらゆる例を出して、「熊本で結核で入院しているときも、毎日のように女性が見舞いに来た。これぐらい俺はほれられているんだ、もてるんだ」と言うわけです。吉本さんはそれに対して、最後の1分で、「そういうふうに広くたくさんの女性にもてるということと、深く愛されるということは、まったく違うことだ」と言って、その言説を引っくり返してしまう。そういうところがありました。

だから、竹内さんがその中国革命に関して、饒舌に語っているというところでは、実は竹内さんのなかでは内面で膨れあがっているような、そういう観念というか、美しい中国革命はいかにあるべきかということ、自分で裏切るというわけではないのですが、それと齟齬をきたすような一種のロマン主義が、彼の精神のなかにあったのだろうという気がします。

思い出話ばかりしていいのかということもありますが、しかし、たぶん明日のセッションでも問題になると思いますが、啓蒙者として、竹内さんは失敗をしました。竹内さんは、常に敗北をしていたという考え方も、先ほど出ていました。竹内さんの若いときの一番の敵対者は、保田與重郎という日本浪漫派の人です。この人は、「自分は常に偉大なる敗北のことだけをうたい続けてきた」と。敗北は、実は現実的な失敗であるわけです。その描かれた革命の夢とか、あるいは民族の精神は、現実には失敗せざるを得ないわけです。失敗せざるを得ないにもかかわらず、「もはや成敗を問わない」というかたちで、その夢を描き続けます。これは当然、現実には失敗するわけですが、「私は、偉大なる敗北の詩（うた）をうたい



続けてきたのだ」という保田與重郎のことがあります。

戦前において一世を風靡した保田與重郎は、竹内好さんと大阪高校で同級生でしたが、そういう「偉大なる敗北」の詩をうたい続けてきた保田與重郎に対して、自分はどうしていくのだというのが、竹内さんの思想的な出発点だと考えています。

そこで、魯迅を見いださなければ、彼自身は保田與重郎から自立して、あるいは日本浪漫派から自立して、自分の言葉というものを見いだせなかったのではないかという気がしています。少し抽象的になるかもしれませんが、保田に対する竹内好の位置付けというものが、思想的な出発点として、私にとらえられると思います。その思想が、2000年を越して21世紀になって、もう一度取り上げられるという意味は何なのかということを考えないと、過去の思想史研究になってしまうという側面があります。

竹内好さんがどのように思想を形成したのかは、若い私にとっては非常に興味があったことです。また、思想史研究する者にとっては興味があると思いますが、今、なぜ、竹内好なのかということが、たぶんここに来ている人々にとって、ある共通の思いとしてあるのではないかということを考えています。以上です。

●一司会 最後のところが、結構大事かもしれません。「今、なぜ竹内か」という問題ですね。中国では張寧さんから、今、竹内が問われる理由について、中国人としての立場からお話になったと

思います。

黒川さんのほうから、張寧さんの報告にかかわって発言が求められていますので、まず先に黒川さんから。

●—黒川 張さんに質問したいのですが。1986年に竹内の『魯迅』が中国で出版されて、これはそれほど広くは読まれずに、去年（2005年）『近代の超克』という表題で新しく論文集が出たということですね。300ページほどの本で、かなり広く読まれたというお話を冒頭のところでうかがいましたが、新たな読者層としては、それほどのような人たちに読まれたのかということが1つ。それと、この新しい論文集には、表題作の「近代の超克」以外にどのようなものが収録されていたのか。やはり端的には、この表題作の「近代の超克」がインパクトをもって受け止められたということだったのでしょか。それを少しおうかがいしたいと思います。

●—司会 張寧さん。

●—張寧 感謝黒川先生の这样一个問題。其实就我所知，当然都是学者、未来的学者，就是学生。我自己看到的，一些硕士生甚至一些本科生也在读，但多是学术界的，就量来说不是很大，但是它有一个效应，比如说去年就组织了中国第一个关于竹内好的专门的会议，一个研讨会，去了很多人，也引起了比较大的反响，紧接着《读书》也有几篇文章，我还没有看到。对竹内好，中国不少杂志都有回应。而且这个问题我想最好让孙歌老师说，她版权拿多少，就知道发行量有多大了。

我再补充一句，竹内好就我个人的经验以及我熟悉的朋友的经验来说，他的冲击力主要是思维方式上的，我个人的感觉还有就是可以和他进行灵魂的对话，像竹内好在大东亚战争中发表的那样的文章我们也注意到了，国内学者对他的这种倾向，薛毅教授刚才也涉及到了，这些都了解，甚至感觉到他对中国确实是一种雾中看花，所以我们能认识到的局限也都认识到了。由于我们有这样一段历史，就是说没法把自己打扮成上帝，与魔鬼同行过的人

都有一种魔鬼性，所以说竹内好所具有的这种局限性，就我个人的感觉上来说，不太可能把他作为权威知识，因为他本身就有消除权威知识的这么一个内在的结构，如果不这样看待的话，那么就会夸大他的负面影响，这个负面不会对我们有太大的影响。说到影响呢，就是他恰恰提供了我们的现代视野中所没有的东西。

●—司会 では、孫歌さんからお話をということでしたので、孫歌さんから補足をお願いします。

●—孫歌 私はあまり印税をもらっていません。まずここで少し説明したいのは、1人の思想家とか、1冊の本が売れているかということ判断するとき、まず習慣として、私たちは数から考えます。そして、数が少なければ、あまりこの本は影響力がないと考える習慣があります。学術書の場合には、おそらく数より読み手の質の問題だと思います。つまり、どのような人がこの本を買って読んでいるかによります。

竹内の場合には、数も、実は少なくはありません。しかし、大した数でもありません。1万冊にはなっていません。そして、今でも初版は完全には売り切れていないと思います。徐々に徐々に買われていて、そして批判があれば売れるという、世界のどの国にも共通するルールに従って、最近では、はるばる日本からの学者も、中国で竹内批判の論文を発表したし、中国の一部の研究者は、それに乗って一緒に批判しようとしてしました。おそらく、これからは売れるだろうと、私は期待しています。

それより重要な問題は、なぜこの本をつくって、こういうかたちで出したかという問題です。先ほど、このなかにもどのようなものが入っているかという質問もありましたが、1980年代に出された竹内の作品は『魯迅』だけでした。そして翻訳だけで解説なしのものです。だいたい日本のものは、福沢諭吉も含めて、まったく研究、解説を書かずに出せば、ほとんど読まれないです。

つまり、素直に日本のものを受け入れる土壌は、

当然、中国にはないわけです。何か転換をしないと読む読者層はつくれません。

1980年代の『魯迅』は、そういうかたちで翻訳されたわけです。それにもかかわらず、私の目から見れば、これは張寧さんとは少し違う意見ですが、その海賊版として出された『魯迅』は、中国で大変読まれたと思います。というのは、1980年代の魯迅研究は、竹内の『魯迅』なしに考えられないからです。

つまり、中国の魯迅研究のなかで、魯迅を人間として扱い、魯迅の思想を中間物として扱うという動きは、やはり竹内の『魯迅』が翻訳されて初めて現れたわけです。そして私の知っている何人かの優秀な魯迅研究者は、竹内の『魯迅』を読んで、自分の魯迅研究をスタートしました。

ですから、ある意味では1回目の竹内の翻訳は大変成功したと思います。ただし、その成功した範囲は、中国の狭い意味での魯迅研究という範囲でしかありませんでした。しかし、2回目の竹内翻訳は少し状況が違いまして、張寧さんがいろいろ先ほど言及されたとおりでありますが、中国の世界のなかで、今、少し行き詰まっている状況もありますので、西洋理論以外の新しい可能性を、今、模索しています。そのなかで、竹内好は読まれたわけです。

新しい翻訳のなかで、『魯迅』以外には、まだ10本の論文が入っています。もちろん「近代の超克」はその1つ。なぜ題名になったかということ、編集者からの強い要望に妥協して、私はやむを得ず同意しました。本当は、そのタイトルにしようとはしませんでした。中国の非常に有能な編集者の直感で要求されて、つまりこのタイトルを付けたら売れるでしょうと。つまり、そろそろ中国も「近代の超克」の時代に入るのはないかなという、鋭い直感で、このタイトルが付けられたわけです。

『魯迅』、それから「近代の超克」、「大東亜戦争と吾等の決意(宣言)」、「中国文学」の廃刊と私、

「近代とは何か」、「屈辱の事件」、「アジアにおける進歩と反動」、「私たちの憲法感覚」、それから「戦争体験の一般化について(ある歴史家への注文)」、つまり、「若い友への手紙」など、合わせて11本の論文が入っていました。

そして私個人的な狙いがありまして、この本は、できれば中国文学部以外の学者に読んでいただきたい。この目的は、それほどうまく達成できませんでした。というのは、やはり中文の世界のなかで、一番強い反応が表れたからです。今日、ここに座ったお二人も中文の教授です。そして、去年は上海で開かれた「竹内と魯迅」というシンポジウムも、基本的に中国文学研究者を主体にしたものです。

なぜ、このようなことになっているかについて、ここでは、時間の関係であまり説明できませんが、私の狙いについて少し説明させていただきます。

中国の魯迅研究は、ある意味では、もう1980年代以来、自分の輪郭ができました。おそらく、竹内の『魯迅』から、さらに学ぶことは、これ以上はほとんどないのではないかと、私はそう思います。逆に言えば、中国の思想家は、竹内から学ばなければならないことが多くあると思います。

つまり、竹内の『魯迅』も含めて、すべては中国研究のテキストではなくて、中国文学研究のテキストとしてではなくて、歴史哲学、あるいは思想のテキストとして読んでいただきたいです。この部分は、中国の思想界のなかで一番弱いところだと思います。もし竹内が、このようなかたちで読まれれば、おそらくこれからの中国の思想建設は、もう少し違う展開ができるのではないかと思います。

この本は、去年の4月ごろに出版されました。今は、まだ結論を出すには、おそらく早すぎます。もっといろいろな批判も含めて、中国で竹内が話題になれば、おそらく違う専門の人たちも一緒に考えていくだろうと私は予感しています。

今月中旬まで、私はアメリカに滞在して、2カ所の大学から竹内について話をしてほしいと呼

ばれました。そして、彼らと具体的に議論してわかったことは、竹内はアメリカでは、中国文学研究者として読まれた部分もありますが、それは主要な扱い方ではありません。

例えば、こういう話があります。アメリカのなかで、いろいろなポストというふうに名付けられた理論は、そろそろ行き詰まっています。これからは、ポスト理論の時代になるのではないのかと。ポスト理論の資源として竹内は読まれるだろうと思います。

ですから、おそらく日本と中国は、これからいろいろな違う読み方も現れると私は期待しております。以上です。

●一司会 面白い話をありがとうございました。まだお話をうかがいたいのですが、皆さんの討論の時間もありますので、今、松本さんからのコメント、それに黒川さんの質問に対する張寧さん、孫歌さんの発言をお聞きになって、それぞれ皆さん、考えるところがあると思います。ご自由に発言いただいてもいいのですが。では菅さんから。5分ぐらいをお願いします。

●一菅 お断りしておきますが、私は竹内がエスニシティーなどということを考えていたとはひとつも言っていません。竹内の考えたことをそういうふうに転換させてとらえなければ、今日、竹内の思想の生命はサバイバルできない、それでは創造的継承とはいえない、と申し上げているのです。これは後世の読みの課題であって竹内さんその人の問題ではありません。ネーションにはステートがはりついています。ステートを前提しないと成立しない思想は、今日ではゴミでしょう。竹内好をそういうふうには引き継ぎたくない、ということです。思想がもつ価値とか意味というのは時間と空間の変化が生み出す関係性の変異によって姿をかえなければ引き継がれないと思うのです。

確かに竹内さんの考え方のなかには、国家をつくり出すということを抜きにした「ナショナル

ティー」とか「ネーション」という考え方はなかったらと思います。

ただ、今、どのように引き継ぐかとか、と考えるときに、いま我々にとってもそれ以外のものがありえないのだったら、終わりだと思えます。

「エスニシティー」「エスニック・ナショナリズム」という変な言葉もあって、現実に存在する「エスニシティー」のなかでも、国民国家の獲得というスローガンはまだ生きています。しかし、「エスニシティー」といわれている人のなかには、「ディアスポラ (diaspora: 流浪の民)」で、国家を持つことと関係がないという人たちもいるわけです。そういう人たちにも、どのように身を寄せる思想になり得るかというところで、はじめて現代的に竹内さんの「ネーション、ナショナルティー」にかかわる思想を生かすことができるのではないかというのが私の考えです。

それからネーション→エスニシティーの問題とは別に、もう2つ言っておきたいことがあります。

フランスにベルナル＝マリ・コルテス (Bernard-Marie Koltès) という劇作家がいました。エイズで亡くなってしまいましたが、その人の作品に『森の直前の夜』という、1人役者が出てきて、延々2時間1人でしゃべりまくるという芝居があります。その芝居で、その登場人物は闇に向かって「ねえ、きみ」と語りかけます。「きみ」というのは、フランス語だとカマラード (camarade: 同士) です。この場合、ロシア語のタワリシチではなくて、カマラードです。不在のカマラードに向かって、延々2時間しゃべるというお芝居です。不在のカマラードが言葉を持つとき、不在のカマラードが語りだすときに世界は変わるというイメージをずっと語り続けるわけです。

言葉を持つというのは、実際にその不在のカマラードが新しい言葉を持って登場するのか、言葉ではない暴力性として登場するのか、それはわかりません。どのようなメタファーなのか、よくわ

かりませんけれども、ただひたすらそれだけを語り続けるというお芝居です。

これはコルテスという作家にとっての「掙扎」だったのではないのかという気がします。二十歳のときにアメリカに行って、ニューヨークで1968年にエイズになってしまいます。コルテスはホモ・セクシャルで、いろいろな意味で自分のアイデンティティの揺らぎを抱えながら、境界の向こう側のカマラードに橋を架けたい、しかし、架けられないという閉塞した関係性を表現した作品です。

現代の「掙扎」のひとつのかたちは、こんなふうになるのではないか。それは性的関係のアポリアということではなくて、それを介して世界のなりたちのアポリアを形にしようとしてた試みだと思えます。それからもう1つは、『三月の五日間』という、これは日本人の岡田利規という劇作家兼演出家の芝居についてです。『三月の五日間』というのは、イラク戦争が始まったときの3月の5日間です。この国にはいろいろな反戦的なことを主張したり、戦争を描いた芝居はあるのですが、見ていて感心したことは1つもありません。

結果として人ごととして戦争が語られているからです。日本人にとっての戦争は、「こういうふうに語るしかないんだな」と納得させてくれたのは、『三月の五日間』でした。『三月の五日間』は、渋谷のラブ・ホテルで、何人かの若者がとっかえひっかえセックスする、それだけのことの叙述です。この五日間にすることはそれしかないという、このリアリティー、たぶん日本人がイラク戦争にかかわるといのは、そういうふうに表す以外にないのだというのが、すごくよくわかりました。

そのことのほうにリアリティーがあるという日本に、私たちは生きていくのだなと。こちらが「良心的」反戦劇よりリアリティーがあると思いました。しかし、このローカルな、渋谷の若者や、それを見る年寄りの私まではわかるけれど、日本人でなければわからないこのローカルさというも

の、きっとこれは中国のお客さんに見せたとしたら全く理解されないだろうし、イラクで見せたら、怒った観客に殺されるかもしれない。

つまり、相互理解の橋が架かっていない。コルテスのテキストとつき合わせて言うと、姿をあらわして来ないカマラードにひたすら語りかけるというふうに提示される「掙扎」のかたちと、『三月の五日間』の戦争のリアリティーの不在のリアリティーはつりあっている、ということです。ここにどのように橋を架けるかというのが、思想的にも芸術的にも課題なのではないかと思っているということが、申し上げたかったことの本意です。

●—司会 今の「エスニシティー」の問題を補足します。私は内モンゴル出身の文化人類学者で親しくしているナリビリカという人がいます。内モンゴルのモンゴル人は、かなり民族として、ネーションとして、非常に急速に衰弱しているという意識、危機感を持っています。その危機感のなかで、「エスニシティー」という言葉が意味をかえはじめています。

つまり、「エスニシティー」自体は、本来は非政治的な、あるいは非政治性を帯びた言葉です。その非政治のなかに政治を見るという、非政治、イコール政治という構図をつくり出そうとしています。そういうかたちで民族学に、ある大きなインパクトを与えようとしています。それも考えていただいたほうが、いいのではないかと思います。

●—松本 非政治のなかに政治性を見いだすというのが「エスニシティー」という発想につながってくるとおっしゃられましたが、例えば60年安保のときに、竹内さんが啓蒙者として国民の前に出てきて、「民主か独裁か」というテーゼを打ち立てました。これはものすごい政治性なのです。あれかこれか、ですね。つまり、そこには「掙扎」のもだえみたいなものが、一応全部押し消されて出てきているわけです。竹内さんの魯迅像は、確かに「掙扎」ですが、「民主か独裁か」と言った場合には、60年安保闘争のテーマとして彼が考

えていたのが「民主か独裁か」ということで、これがやはり国民のなかには非常に受け入れられました。逆に私などは、「民主か独裁か」ということで、60年安保闘争を要約したり、スローガン化したりするのはおかしいのではないかと考えます。

「エスニシティー」という言葉は、1972年に初めて英英辞典のなかに出てきます。イギリスの辞書のなかには。ですから、60年代には、「民主か独裁か」という発想のなかには、「エスニシティー」という発想は成立していない概念だと考えていいと思います。

それは新しい言葉をつくり出して、モヤモヤとした状況に言葉を与えていくというのは、これは思想家のやることであったり、学者であったりするわけですが、その意味では、「民主か独裁か」というスローガン化のなかには、「エスニシティー」という発想は、痕跡もないのではないかと思います。

●—司会 そうですね。状況における言葉というものと、つまり状況と言葉というものの、1つのリンクした在り方も問題にしないといけないと思いますが、今、松本さんが言われたことは、討論するに十分値する問題だと思います。では黒川さん、もう1回。短くお願いします。

●—黒川 孫歌さんにお答えいただいたので、それについて一言付け加えたいだけです。

孫歌さんが竹内の『魯迅』について、文学研究の段階を過ぎ、むしろ思想のテキストとして読まれるべき余地がある、とおっしゃったことが非常に面白くて、社会的な文脈が違うかもしれないのですが、それは日本の今の状況にとっても当てはまるなと感じました。

例えば、竹内は魯迅を「反自由主義」だと、戦中に書いた『魯迅』で述べている。それは魯迅が自由主義に反対だったという意味ではないでしょう。むしろ、外来思想の自由主義を自身の胃袋のなかでこなすというか、消化するには、一回、ま

ずはそれに対して立ち向かい、抵抗する、それを通して飲み下していくしかないという考え方だと思います。戦中、戦後を通じて、竹内はそういう態度を自身に保っている。

例えば、戦後憲法というものに対しても、竹内は戦中の自身の「大東亜戦争と吾等の決意」を取り消さない。つまり、戦後憲法というものを、ずっと丸飲みするというよりも、むしろ、抵抗を通してそれを消化していくしかないという考え方だと思います。

第1セッションで出ていた今のアジアとか世界の状況、また、「愛国心」というものも、こうした道筋を通してもう少し深めて考えるという方向が、竹内の態度からみちびき出せるように感じます。

やはり中国、アジアでの戦争でもそうなんですが、間違ったことをやったことについては、その誤りを自分たちで正せるということからしか、自国への「愛国心」は生じようがない。ところが、今の政権、自民党政治家みたいな人が言う「愛国心」は、政権あるいは政権党に文句を言うということへと、ずれていく。思想として、これは墜落でしょう。もし竹内が「愛国心」を論じたなら、それもまた「抵抗」を介したものになったはずだし、これは、具合の悪い自国政治は批判し、政権を交替させていく、そういう国民としての責務も含んだものとなったはずです。私は常々そう思っています。

そういう意味で、文脈が少し違うかもしれませんが、孫歌さんの発言は、大変面白いなと思って受け取ったということを申し上げます。

●—司会 それでは鶴見さん、溝口さん、薛毅さんから、岡山さん、順番にあとお1人ずつご発言いただいたほうがいいかと思います。まず鶴見さんからお願いします。

●—鶴見 その対象になっている中国の現在の思想状況がわかっていないので、的外れになるかもしれませんが。

左翼文学が抑圧する力として現れるなかで、これは面白いのです。それは中国にとっては、新しい状況だったのでしょう。抑圧される力として意識されるなかで、魯迅は新しい意味を持ってきました。これはすごく面白いと思います。つまり左翼文学は、固定化する力を持つのです。思想を。それは固定するように見えてきて、星座はぐるぐると動いています。つまりコンステレーション (constellation) は、動くものだという事、また動かすものだという事に介入してくる力として、竹内『魯迅』が働いたというのは、すごく面白いと思います。

竹内さんは演説するのは嫌いですが、矢崎泰久の求めに応じて演説したことがあります。それは竹内研究のなかではあまり使われていません。そこで、「終了」というのがよく出ています。ああいうのは、竹内さんは好きなのです。「終了」と。竹内さんが演説したなかで、昔は反対の流派があったからよかったと言っています。急に「弁士中止」というと、どんどん降りてしまいます。それが竹内さんの本来のかたちなのです。初めからしゃべらないで、ただ黙っているというやり方だけではなくて、自分が演説していると、ぱっと、自分で「弁士中止」と言ってやめて降りてしまうのです。あのかたちは、やはり竹内の思想表現の面白いかたちです。

つまり、混沌の方法、せめぎ合いの方法、自分の思想表現のエッセイのスタイルのなかで使うのです。これは、決して大正から昭和に入って、よく使われている方法ではありませんし、一中東大のやり方でもありません。竹内さんは一中ですが、別の方法を何かで編み出してきてしまうのです。それは何かというと、混沌から、混沌を捨てないで考えていく方法です。つまり、曖昧、アンビグイティー (ambiguity) を、決して切り離さない思索の方法です。これはあまり日本では、大学に入るような人は、この方法を使いません。なぜかというと、大学に入ってそんな方法を使っている

と、成績がよくなるらないのです。大学も入れないのです。これは答案を巧みに書く方法ではないです。答案を巧みに書くには、「これこれ、これこれ、論点はいろいろあるが、自分はこのうちA、B、C、3つの点にとどめる」。これをやると、「ああ、この人はいろいろなことが合っているのだけれども、3つ、それをきちんと要約するのだな」といって、高点をくれるのです。だいたいこれが100点近くを取る方法なのです。その思索、方法を、竹内さんは捨ててしまったのです。第一『魯迅』のときから、戦後にわかりやすくなっただけけれども、やはり同じなのです。このアンビグイティーを捨てない、自分の思索方法のなかで、常にそれと一緒に同伴していく方法です。これがユニークなものなのです。

もう1つは、菅孝行さんの話では北村透谷を評価されました。北村透谷には、それがありました。非常に読みにくいですが、創作もきれいではありません。この竹内さんの第一『魯迅』からやっていく方法は、魯迅から毛沢東へと言われました。そのポイントなのですが、毛沢東を、ある仕方です。竹内流に要約するときに、竹内さんは決してアンビグイティーを捨てていないのです。というのは、共産主義革命にしても、これはつくられつつある革命が、竹内さんにとって毛沢東の面白いところなのです。つまり持久戦論です。根拠地をつくる場所にスポットを当てているのです。「偉大な革命ができて、世界の大国になった、このやり方は」なんて、ぜんぜんそういうことは言って



いないのです。つまり、これはつくられつつあるものとして見るやり方。つくられつつあるものとしての魯迅。そして、その魯迅が同伴して一緒につくっていく共産主義国家としての指導者毛沢東。それはつくられつつある毛沢東なのに、つくられてしまった魯迅は違うのです。つくられてしまった魯迅に対して、万歳、万歳と言っている竹内さんは、どこにもなかったと思います。敗北の持続の問題もあります。敗北しながらどうして持続するか。これはもう、組織論として実に難しい問題です。竹内さんは、それを狙ったと思います。だから、60年安保の負けたときにぜんぜん落胆していないでしょう。どのようにしたら続けられるのでしょうか。

1960年の6月19日午前零時に、新安保条約の自然成立ということがありました。私は自分の細君と一緒に国会の横に立っていました。細君が「自然成立のときに、ぜんぜん落胆しなかった。力を感じた」と言いました。「こんなことになるなんて」とか、「うわっ」とか、泣く者もいませんでした。ただ自然にじっと耐えていました。そのときに力を感じました。抑え込む力です。その直感は正しかったのです。というのは、それからさまざまな論壇雑誌、『読書人』や何かでは、下がっていたように見えたけれども、3年経って、自然成立としては日本最大の運動のベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）が起こるのです。その60年6月18日のただの沈黙。そこには18万ぐらいの大衆がじっとしていたのです。それに力を感じたという私の細君の直感は正しかったのです。それが3年後に、小田実をはじめとして、ものすごい大きな日本全国で100万人を超える運動が自然発生的に起こったのですから。何も母体はないのですよ。強いて言えば、母体は「声なき声の会」という、そのとき7人まで落ち込んでいる集会だったので。7人から、あっという間に100万人を持ち上

げるだけの持久力がありません。それがあのときの敗北の持続の方法なのです。

これからはどうなるかわかりません。これからの竹内さんの組織論は、どのように展開するかわかりません。できれば、敗北の持続の方法を皆さんで案出してください。編み出してください。それは竹内さんは亡くなる時に期待していたと思います。

それは現に、漫画の片隅にありますね。例えば、夕べ見た『弁護士のくず』なんていうのは、あるね。それから『クロサギ』などというのがやっぱりあるのです。これは、敗北の持続の方法はきちんとあるのです。その元は漫画です。

●一司会 どうもありがとうございました。薛毅さんと岡山さんは明日の第3セッションで発言されますので、時間がありませんので、最後の時間を溝口さんにお預けしたいと思います。

●一溝口 先ほど、60分の内、59分黙っていて、最後の1分というのは私が好きなことです。その1分を使わせていただきます。ただし、私は、竹内好のように引っくり返すことができなくて何もお答えできなくてごめんなさい。以上です。

●一司会 フロアからも質問をお受けしたかったのですが、私の手違いで饒舌に話をされるのを食い止めればよかったのですが、そうもいかなかったものですから、時間がきてしまいました。

それで、今日の自由討論のときにフロアからご質問できなかったのは、明日の午前中、それから午後、自由討論と総合討論、全部で討論の時間は3回ありますので、それを使って皆さんに十分ご発言いただきたいと思います。今日は長い時間、ありがとうございました。もう一度、こちらに座っておられる方へ拍手をお願いします。

●一総合司会 どうも今日は大変有意義なシンポジウムをありがとうございました。また明日、引き続きよろしく願いいたします。